



令和5年度

第5回大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州 ビーバートン市、ユージーン市研修派遣



2023年10月12日～10月20日

令和5年度フレンドリーシティ交流事業

第5回大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州

ビーバートン市、ユージーン市研修派遣事業

団員名簿（学年、五十音順）

派遣期間：令和5年10月12日(木)～10月20日(金)

No.	役名	氏 名	性別	学校名 役職名 もしくは 学年
1	団長	たかはし ときお 高橋 時雄	男	(公財)大垣国際交流協会 常務理事兼事務局長
2	総務	かとう さきこ 加藤 咲子	女	(公財)大垣国際交流協会 ビーバートン・ユージーン・グレンアイラ・ 邯鄲部会 委員
3	総務	よしやす みえ 吉安 三恵	女	(公財)大垣国際交流協会 職員
4	団員	なかしま ふたば 中島 双葉	女	岐阜県立岐阜高等学校1年生
5	団員	いまい かい 今井 海	男	岐阜県立大垣北高等学校2年生
6	団員	こたけ あづき 小竹 杏月	女	岐阜県立大垣東高等学校2年生
7	団員	じょうがん なおみ 成願 治海	女	岐阜県立大垣北高等学校2年生
8	団員	はせがわ ちはな 長谷川 知英	女	岐阜県立大垣西高等学校2年生
9	団員	むらなか みお 村中 望桜	女	岐阜県立大垣東高等学校2年生
10	団員	もり たくと 森 拓人	男	岐阜県立大垣北高等学校2年生
11	団員	やすだ しおり 安田 汐里	女	岐阜県立大垣東高等学校2年生
12	団員	かわい すばる 河合 昂	女	岐阜県立大垣北高等学校3年生

第5回大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州 ビーバートン市、ユージン市研修派遣団 日程表

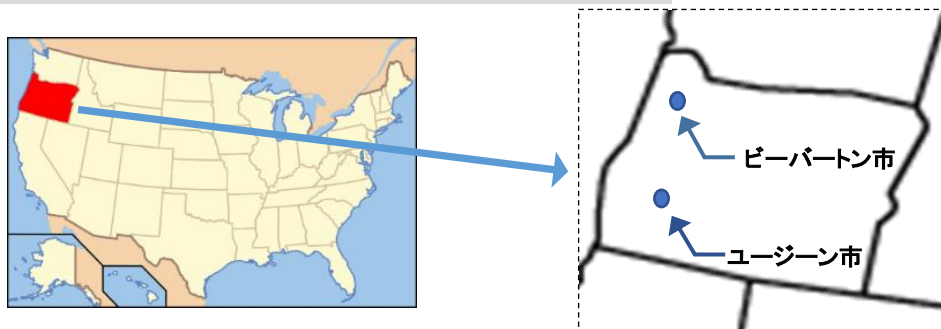
派遣期間： 令和5年10月12日（木）～10月20日（金）〔9日間〕

派遣人数： 12人（高校生9人、引率者3人（団長1人、総務2人））

	月 日	現地時間	交通機関	日 程
1	10月12日 （木）	9:00 16:05 9:15 11:55 12:59 17:00-19:30	デルタ航空(DL166) デルタ航空(DL3909)	大垣駅集合 9:26大垣駅発⇒名古屋駅、品川駅経由 ⇒12:16羽田空港第3ターミナル駅着 羽田空港発(シアトル空港へ)〈飛行時間 9時間10分〉 ----日付変更線(時差16時間)---- シアトル空港着(入国手続) シアトル空港発(ポートランド空港へ)〈飛行時間 1時間4分〉 ポートランド空港着 Beaverton高校の生徒とWashington Square Mallで夕食と買い物 【ホテル泊(ビーバートン市)】
2	10月13日 （金）	7:30頃 9:00 14:00頃 17:00頃	貸切バス ↓	ホテルにて朝食 チェックアウト、ホテル出発 コロンビア川溪谷(マルトノマの滝、クラウンポイント) ユージン市に向けて出発〈所要時間2時間〉 South Eugene高校にてホストファミリーと対面しホストファミリー宅へ 【ホームステイ①(ユージン)】
3	10月14日 （土）	終日		《ユージン市》 各ホストファミリーと1日過ごす 【ホームステイ②(ユージン)】
4	10月15日 （日）	終日		《ユージン市》 各ホストファミリーと1日過ごす 【ホームステイ③(ユージン)】
5	10月16日 （月）	8:00-15:00		《ユージン市 学校訪問①》 高校訪問【ホストブラザー、ホストシスターと一緒に授業を受ける】 ◇Churchill高校、Sheldon高校、South Eugene高校の3校に分かれる 【引率者】 各学校訪問とユージン市役所訪問 【ホームステイ④(ユージン)】
6	10月17日 （火）	8:00-15:00		《ユージン市 学校訪問②》 高校訪問【日本語クラス参加(プレゼンと生徒との交流)】 ◇Churchill高校とSheldon高校の2校に分かれる 【引率者】 各学校訪問 【ホームステイ⑤(ユージン)】
7	10月18日 （水）	7:00 7:20 10:00-11:00 11:30-12:30 13:00-14:30 15:00-16:00	貸切バス ↓	《ビーバートン市》 サウスユージン高校集合しホストファミリーとお別れ ユージン市を出発し、ビーバートン市へ〈所要時間2時間〉 NIKE WORLD Campus(NIKE本社) ビーバートン市警察署 SUNSET高校 ビーバートン市役所 【ホテル泊(ポートランド空港周辺)】
8	10月19日 （木）	4:00 6:45 7:46 10:50	デルタ航空(DL2529) デルタ航空(DL167)	ホテルを出発し、空港へ ポートランド空港発(シアトル空港へ)〈飛行時間 1時間1分〉 シアトル空港着 シアトル空港内で各自朝食 シアトル空港発(羽田空港へ)〈飛行時間 11時間10分〉 【機内泊】
9	10月20日 （金）	14:00 19:15		羽田空港着(入国手続き、スーツケース発送手続きなど) 15:53羽田空港第3ターミナル駅発⇒品川駅、名古屋駅経由 ⇒19:10大垣駅着 JR大垣駅解散

訪問先の紹介

米国オレゴン州ビーバートン市、ユージーン市



大垣市のフレンドリーシティが米国オレゴン州に 2 都市あります。今回の派遣事業では両都市を訪問しました。

【ビーバートン市】

州最大都市のポートランド至近にあるため、商業地区へのアクセスがよく、スポーツメーカーのナイキ本社や IT 関連企業が立地し産業が盛んな一方、自然豊かな溪谷に恵まれ、家族と暮らしやすいまちとして知られています。また、市内には日本語教育プログラムをもつ高校が複数あり、日本文化への関心が高いまちでもあります。



【ユージーン市】

州内で 2 番目の人口規模を誇る都市です。市内には、日本からの留学生が多いオレゴン大学などが立地し、教育環境に恵まれた学園都市です。また、日本語教育プログラムをもつ小学校や高校が複数あり、日本文化への関心が高いまちでもあります。



【両都市との交流のきっかけ】

両都市との交流は、平成 2 年(1990 年)にオレゴン異文化交流協会の高校生訪問団が大垣市を訪問したことがきっかけです。これ以降、市内で活動する国際交流団体 WING が中心となって、毎年継続して受入れをしてきました。

この訪問団は、主にビーバートン市とユージーン市の高校生で構成され、これまでに数多くの両市の高校生が、大垣市でホームステイなどによる交流をしています。

こうした長年にわたる両市との交流から、平成 27 年(2015 年)11 月に小川市長(当時)が両市を表敬訪問し、フレンドリーシティ交流を正式にスタートさせました。

平成 28 年度(2016 年度)に第 1 回の派遣事業を実施し、その後毎年実施しています(新型コロナウイルスの影響で令和 2 年～令和 4 年は中止)。

	大垣市	ビーバートン市	ユージーン市
人口	約 16 万人	約 10 万人	約 17 万人
面積	206km ²	50km ²	107 km ²

国際交流を支えるキーパーソン

公益財団法人大垣国際交流協会 事務局長 高橋 時雄

今回のアメリカオレゴン州への学生派遣は、コロナ禍により4年ぶりの再開となりました。今年の4月から協会事務局長を務める立場として、また派遣団長として、今年10月に実施する派遣学生の研修が充実したものとなるよう支援するとともに、現地の関係者の方々と交流し、将来にわたる交流の継続を模索することを目標としました。今回は、“交流は人”であるという視点から、現地でお世話になった方々との交流を振り返りたいと思います。

まずは、現地で30年以上にわたり学生交流の指揮を執られるオレゴン異文化交流協会会長の小沢先生です。現地、オレゴン州でのホームステイの手配、市役所及び高校への訪問や市長を交えた懇親会の手配など、ほとんどの連絡調整を一人でされ、また今年6月にはオレゴン学生派遣団の大垣への訪問を引率されました。まさに交流とは人であることを実感させられる、経験豊富な交流事業の司令塔的な存在です。

ゆえに、引き続き本事業へのご理解をいただき、今後の交流事業の継続に向けた先生の考えや交流手法を学ぶことが、思い起こせば私の一番大きな目標だった気がします。

そのほか、訪問した4つの高校では、私たちの訪問を温かく見守っていただいた校長先生や、ご支援、ご指導いただいた日本語教室の先生方には大変お世話になりました。また、先生方が創意工夫をされながら、魅力ある日本文化を発信されてみえる姿に元気をもらいました。派遣学生による大垣市や日本文化の紹介では、準備の成果を十分に発揮し、現地の学生に高い関心を持っていただき、また、日本のアニメ、豊かな自然、そして歴史ある建築物などに関心をもってくれる学生が予想以上に多いことに、日本に対する印象の良さを感じました。

ユージーン市では、現地関係者の方に市内を案内してもらい、またワイナリーやサタデー・マーケットなども見学しました。この町の名物で全米発祥の地でもあるサタデー・マーケットでは、近辺の工芸家などが、スプーンやフォークなどを再利用した手作り感溢れる指輪やブレスレット、風鈴などの作品を売っています。隣ではオーガニック農作物などを売るファーマーズ・マーケットが併設され、メキシコ音楽なども演奏されるなど、異国情緒と解放感にあふれ、多くの人々で賑わっていました。大垣市と駅前通りなどでマーケット交流ができると面白いと思いました。

その後、ユージーン市ではヴィニス市長にお会いし、日本で体験した先進的なトイレのお話で盛り上がりました。また、将来的に心配な大地震の発生や日本での水害のこと、またホームレスの話題などに及び、現在は市庁舎の再建に取り組んでいるとのことでした。一般のレストランで、市長と食事を共にできる機会を調整いただいた小沢先生の交渉力には敬服します。



またビーバートン市では、市長にお会いできませんでしたが、市長室のネイサン秘書官が市庁舎や市内を案内してくださり、路面電車の停車駅が市役所に隣接しアクセスに便利であることや、中心地のポケットパークがイベント広場として利活用されているほか、産業分野ではポートランド空港も近く、ナイキの本社があるなど優良企業の立地に恵まれている説明がありました。日本で深刻

な問題となっている「少子高齢化」について当市の状況を質問したところ、国内外からの移住者が多いため、深刻な問題はないとのことでした。両市共通の問題かと思いきや、お国事情もいろいろだと考えさせられました。

また同市の警察署では、過去に日本で英語指導をされ、日本語が堪能なラム巡査部長に署内を案内していただきました。そこでは手錠をかけられ、パトカーや独房に入るなど、逮捕の実体験までさせていただきましたが、私の逮捕体験が一番盛り上がったようです。ちなみに巡査部長は今まで拳銃の実射経験はないとのこと、市の治安が良い印象をもちました。

そして今回の研修のメインである、派遣学生を家族の一員として受け入れていただいたホストファミリーの皆様です。

最後のホストファミリーとのお別れの際には、日本のことわざで「一期一会」をご紹介しました。学生を家族の一員として手厚く受け入れていただくなど、一生に一度の出会いを大切にいただいたホストファミリーの皆様に深くお礼を申し上げます。

以上、今までご紹介した方々も含め、すべての関係者の方々と一つの出会いが、大きな交流の輪となって繋がっていくことを実感し、また大切にしていきたいと感じました。

我々が帰国した後、現地でお会いできなかったビーバートン市のビーティ市長が大垣市を訪問されました。その際に、「軍隊に従事した経験から、最近の不安定な世界情勢をより良く理解するためには、実際に現地を訪問して、現状を自分の目で見て、コミュニケーションをとることが必要だと思います」というような内容のことを言われたことが心に残りました。

近年の世界情勢は、地域により宗教・領土紛争が起こり、また政治的に緊張した隣国関係が続いています。争いではなく、国際交流を通じて宗教や文化、価値観の違いを認識し、同じ人間としてお互いの環境や存在を尊重し合うことにより、多文化共生や世界の安定・平和に少しでも繋がることを心から期待します。

最後になりますが、今回の4年ぶりの交流事業の再開について、多くの現地関係者の方々が待ち望み、また喜んで対応していただいたことを実感するとともに、今回の研修で窓口としてお世話になった方々との出会いに感謝し、今後の交流事業の継続に生かしてまいりたいと思います。

また派遣学生のみなさんには、今回の異文化交流を通じて得た貴重な体験を、これからの人生に活かしていただけたら幸いです。



研修を終えてー成果と課題ー

(公財)大垣国際交流協会 ビーバートン・ユージーン
グレンアイラ・邯鄲部会委員 加藤 咲子

コロナ禍で中止されていた高校生研修派遣事業が4年ぶりに再開となり、10月12日から9日間の日程で、高校生9名、引率者3名を含む12名がフレンドリーシティのアメリカオレゴン州ビーバートン市・ユージーン市を訪問しました。私は、今回が3回目の引率となりましたが、前回の経験を活かし、団員が充実した研修ができるよう、健康面、安全面等でのサポートに努めました。無事に研修を終えて嬉しく思います。



今回の研修の成果は、大きく3点あります。1点目は、ホームステイを通して異文化体験ができたことです。実際にアメリカの家庭で、文化や食事、家族同士の関わり方など日本との生活習慣の違いを実感できたと思います。また、ホームステイ先での温かいおもてなしやホストファミリーと過ごした素晴らしい時間は、生涯忘れることのない思い出となることでしょう。

2点目は、英語力の向上、コミュニケーション能力の育成ができたことです。すべての生活様式が英語なので、家族と過ごすことにより日常の中で実践的な英語を学ぶことができました。また、団員が行なった現地の高校でのプレゼンテーションでは、事前研修の成果に加えて、時にはアドリブを交えながら、自信を持って英語でスピーチする団員の姿を見てとても頼もしく思いました。突然の質問にもしっかりと受け答えができ、団員の成長を目の当たりにしました。

3点目は、学校訪問を通して同年代の高校生同士の交流の輪が広がり、文化の違いに対する理解が深まったことです。たとえば車での通学や、自由な服装、曜日によって異なる授業日課や、授業中自由に外出できるなど日本と違う学校のシステムを体験したことです。

課題としては、今回の派遣団員に、今年6月のWINGでのオレゴン高校生ホームステイ受入の経験者が少なかったことです。これまでの経験から、事前にホームステイ受入をしておくことで、兄弟姉妹のように親しくなったアメリカの家族に再び会える喜びは大きく、不安と緊張が少なく家族に溶け込むことができます。また、お互いの交流を持続させることで、本当の家族のような関係に発展して生涯にわたって交流することができます。相互交流のスタートとなるホストファミリーとしての受入を、気軽に体験することができる環境を整えることが大切だと感じました。

他にも、日本の高校生には普段なじみのない、政治や経済、戦争と平和、人種差別やジェンダー等について現地の高校生と議論することで、日本やアメリカが国際的に置かれている立場をより深く理解することができる機会があれば、更なる成長につながるのではないかと思います。



派遣団員のみなさんは、この研修で学んだことや経験したこと、肌で感じたことをきっかけにして、必ず世界に目を向け大きく羽ばたき活躍してくれることと信じています。

今後も引き続き高校生研修派遣事業が実施され、日米の高校生同士の交流が充実したものになるよう、更に大垣市とビーバートン市・ユージーン市の交流が一層深まることを願っています。

次につながる交流の成果

公益財団法人大垣国際交流協会 吉安 三恵

成田空港からポートランド空港の直行便はこの4年の間になくなり、シアトル空港での乗り継ぎが必要となりました。また、いつも訪問させていただいていた高校の校長先生や日本語の先生が変わられたり、以前はなかった建物がいろいろあったりなど、コロナ禍で実施できなかった期間の長さを感じました。しかし変わってなかったこともたくさんあります。向こうでお会いした人々の温かさやおもてなし、おいしい料理などです。そんな日々を思い出しながら、今回の訪問の成果とこれからの交流に向けて感じたことをまとめたいと思います。

その一つは学校訪問の日本語教室での場面です。オレゴンの生徒30人くらいの前で2人の大垣の生徒が前に立っていろんなことをお話しました。質問に答えたり、逆に質問をしたり。何の準備もないフリーなやり取りでしたが、本当に楽しそうに言いたいことが止まらないくらい言葉があふれていました。そしてそれは英語です。こんなに堂々と積極的にコミュニケーションを取る姿は感動的でした。

また、ユージーン市の高校でのプレゼンテーションも大きな成果です。最初の事前研修での練習ではただこなすことに精一杯でしたが、どうしたら興味を持って聞いてもらえるかを考えました。得意なジャンプやダンスの披露をしたり、クイズを入れたり工夫しました。その結果、スムーズに進行ができ、自信を持ってプレゼンテーションをすることができました。

二つは、ホストファミリーとのお別れのシーンです。団員もホストファミリーも涙が止まらず別れがたいものでした。また、日本に着くなり「このまま、またオレゴンに行きましょう」と言う生徒やオレゴンのホストファミリーが恋しくて泣きだす生徒もいました。それは素晴らしい時間を共に過ごし、心が通い合った証であり、交流は大成功だったと言えるでしょう。

一方で、この研修を通して団員が自律的な学びができるような道筋を作れていたかどうか、引率者として反省しています。事業目的にある「異なる文化・歴史・価値観を学び合い将来国際的に活躍できるグローバル人材の育成」が達成できるように、一人ひとりの研修派遣に対する動機や意欲をより一層引き出せるような研修にしていきたいと思います。

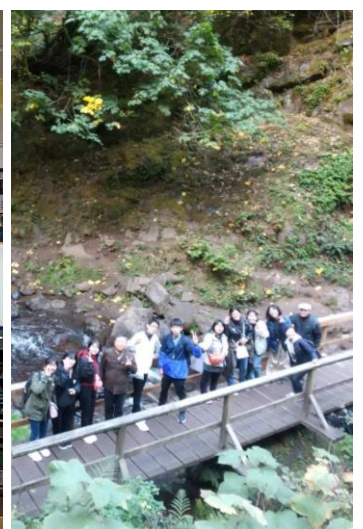
「今までの交流があって今回の交流がある」と感じています。どんな交流ができそうか、両国の高校生はこの交流に何を期待しているかなど過去の交流の成果と反省を踏まえて出発前に現地の先生と話すことができました。先輩団員が素晴らしい交流の成果を残してきたからこそ今回も快く受け入れていただけたはずです。今回の9人の高校生も、次につながる立派な成果を残せたと心から思います。

最後に、オレゴンワインを日本で紹介できる「大垣・オレゴン・ワインカンパニー」を作ろうと、4年前にオレゴンでお世話になっている方と話をしました。今回の滞在中、あるワイナリーが売りに出されていることを知り、その方と「お金を出し合って購入しよう！」という話をしました(購入できる金額ではありませんでしたが…)。大垣とオレゴンを繋げ地域に貢献できる日が来るように、これまでオレゴンとの交流に微力ながら尽力し続けつつ、この夢を見ていたいと思います。





オレゴンの思い出



ユージーン市全体

岐阜県立大垣東高等学校 2 年 村中 望桜

ユージーン市は日本よりも緯度が高いため、自然に囲まれ 10 月中旬ですでに紅葉で色づいていました。ユージーン市を流れる川沿いにはオールトン・ベイカー公園があり、小島の浮く池や様々なオブジェが設置されており、とても興味深いです。生態系が豊かなのか、カモやリスなどのたくさんの自然動物をみかけました。

また、そのような野生動物は公園だけではなく、ホームステイしたお宅の庭や、道路沿いの木々の間、オレゴン大学の敷地内でも見ることができます。さらに、ユージーン市の山間にカスケードラプターセンターという鳥園があります。ここではけがをした鳥を保護し、リハビリをする施設ですが、一般人にも公開されています。どの鳥もけがをしたとは思えないほど、凛々しい姿でそこにたたずんでいます。

野生動物だけでなく、人もまた積極的に活動しています。

ヘンリーコーンギャラリーでは、映画『リメンバーミー』でおなじみのメキシコの死者の日に向けて、様々な作品が展示されており、軽快で情熱的な音楽に合わせてメキシコの伝統衣装を身にまとった女性らがダンスを披露していました。

4 月から 11 月の間の毎週土曜日にサタデーマーケットが開かれます。野菜や卵、パンの他に、加工品やファッションアイテム、絵画や調度品なども売りに出されています。フリーマーケットのように様々な品物が売りに出される様子はすこし大垣の「元気はつらつ市」と似ていると感じました。



ユージーン市には小さな駅があります。ユージーン駅です。ちょうどシアトル行きの電車が止まっており、中も見学することができました。日本の地下鉄を含む電車と違い、本数が 1 時

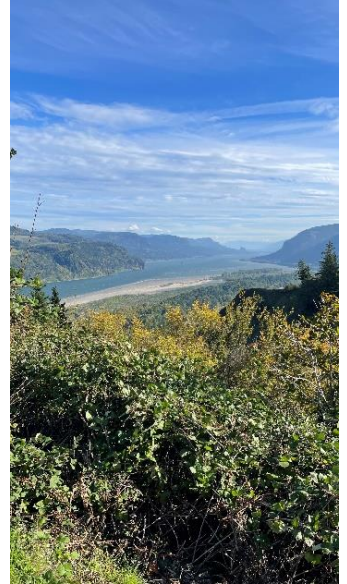
間に 1 本以下だったり、早い時間で終電になったりします。線路は路面電車のようにアスファルトに埋め込まれており、駅では枕木も何もかも丸出しで目と鼻の先に線路がありました。車内は 2 列シートが左右にあり、ひと車両の半分から座席の向きが進行方向と逆になる作りになっていました。出発すると日本に住む我々からしたらありえないほど遅いスピードでゆっくりとシアトルへ向けて走っていきます。その後、等間隔で『ポオーツ、ポオーツ』という汽笛を鳴らし、電車が走っていることをしらせていました。とてもゆっくりであるため、何時間後にシアトルに到着するか、私は見当もつきません。だからこそ、ダイニング車両とカフェ車両が備わっているでしょう。車窓の移り変わりを楽しみつつ食事をし、カフェでコーヒーを楽しむことができるような素敵な時間の使い方ができそうだと感じました。

オレゴンの自然

岐阜県立大垣東高等学校 2年 小竹 杏月

オレゴンはとても自然豊かな場所で、どこを見渡しても自然に溢れていた。

1つ目は VISTA HOUSE 周辺の自然である。VISTA HOUSE とは、ポーランドの建築家で、VISTA HOUSE 協会のメンバーでもあった Edgar M. Lazarus によって 1915 年に建設された。私たちが訪れた日はあいにくの強風で、その建物の中には入ることが出来なかったが、外観から長い歴史があることが感じられた。VISTA HOUSE 周辺からの景色は感動的だった。太い 1 本の川を囲むように、木が林立していた。河川付近の木々が断続的に撤去される日本ではみられない景色だった。



2つ目は MULTNOMAH FALLS である。

この滝はオレゴン州の中でもっとも高い滝であり、落差 189 メートルもあると言われている。散策道を通って、とても近くで見ることができた。近くで見ると滝は感動的で、気持ちがリフレッシュされた。

滝付近にはたくさんの人がいて、有名な場所だと感じた。実際に私のホストファミリーに MULTNOMAH FALLS に訪れた事があるか尋ねてみると、よく行くと言われた。そのことから多くの人に愛されている場所だと感じた。お土産売り場には、MULTNOMAH FALLS 限定とされるものが多く売られており、楽しいショッピングの時間が過ごせた。お土産売り場の上の階にはレストランがあり、そこでみんなで昼食をとった。アメリカらしい食事をとったのは、

その時が初めてだった。アメリカンなサイズにみんなは驚いて、食べきれないメンバーがほとんどだった。その様子を見て、店員さんが doggy bag を私たちみんなに配ってくれた。気遣いのある店員さんの態度から温かい気持ちになった。

3つ目は自然にいる動物たちである。オレゴンには街中の至る所に野生動物がいる。例えばリスである。日本では動物園やリス公園に足を運ばなければ見られないリスたちが、街中を散歩するだけで見られる。友達の情報によると、リス以外にも日本では見ることのない変わった野生動物がホストファミリーの家付近にいたそう。動物好きの私にとって、オレゴンは将来住みたい場所ランキング上位に入ると確信した。



以上のように、オレゴンは自然豊かな場所である。自然が豊かであることで、オレゴンに住む人々は温かい人ばかりなのだと思う。オレゴン滞在中に自分自身は、たくさんの自然を感じ、心をリフレッシュできたことを嬉しく感じ、良い経験となった。



チャーチル高校

岐阜県立岐阜高等学校 1 年 中島 双葉

高校訪問 1 日目、ホストブラザーの母校のチャーチル高校へ行った。ホストブラザーのウォーレンは高校を卒業しているため、日本語クラスのメンフィスと一緒に授業を受けた。チャーチル高校では、授業は選択式で、生徒が選択した授業が行われる教室へ移動していた。90 分の授業が 1 日に 4 時限あり、システムも雰囲気も大学のもようであった。

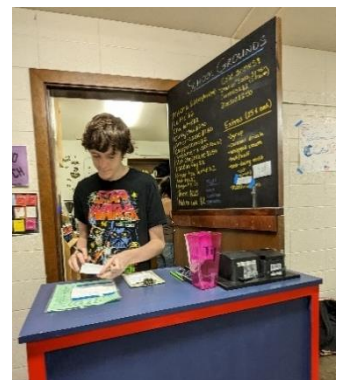
私がチャーチル高校で驚いたことは、主に次の三つだ。

一つ目は、校舎の設備だ。敷地がとても広く、日本とは異なる平屋建てだった。教室を移動する際に階段を上らなくていいのはうらやましいと思ったが、校舎が大きく教室同士が遠い上に、複雑な形になっているため、自分がどこを歩いているのかわからなくなることもよくあった。また、グラウンドの設備もとても充実しており、フットボール用、ソフトボール用などとスポーツごとに専用のグラウンドがあることに驚いた。廊下の壁には所々絵が描いてあり、中庭には芸術的なオブジェが立っていた。セキュリティもとてもしっかりしており、ほとんどのドアは教員の持つカードキーがなければ開けられないようにロックされていた。そのことにも日本との違いを感じた。



二つ目は、授業の活発さだ。教室内の机は基本前を向けられておらず、4 人グループで座るようになっているか、全体がコの字型に配置されているかのどちらかだった。幾何学の問題演習の時間も、積極的な話し合いが行われていたことが印象的だった。グループごとに分かれてプレゼンテーションをする授業もあった。生物の授業では宿題が出されたが、ただ問題を解いてくる、というのではなく、興味を持った微生物が人間に与える影響を調べ、ポスター形式でまとめる、というもので、このような宿題が日常的に出されていることに驚いた。

三つ目は、生徒の授業の受け方だ。1 限目の幾何学の時間、問題演習になると、メンフィスに、“Do you drink coffee?” と聞かれた。話のきっかけにしようとしてくれているのかと思い、“Yes.” と答えると、そのまま学校の売店に連れていかれた。売店にはコーヒーのメニューが並んでおり、彼がカフェモカを買ってくれた。その時は許可されていたようでほかの生徒も教室を出ていたが、授業中に普通に教室を出る自由に衝撃を受けた。売店からはデリバリーもできるそうで、2 限目の生物の授業中に何回かデリバリーのコーヒーが運ばれてきた。ほかにも、授業中にお菓子を食べているなど、授業の受け方が人によってばらばらなところが新鮮だった。



チャーチル高校を訪問し、私は生徒の自由で積極的な様子に驚かされた。特に、わからないところがあればすぐに質問をする、自分の考えをまとめて発表する、といったことが当たり前になっており、私もその積極性を見習いたいと思った。

シェルダン高校

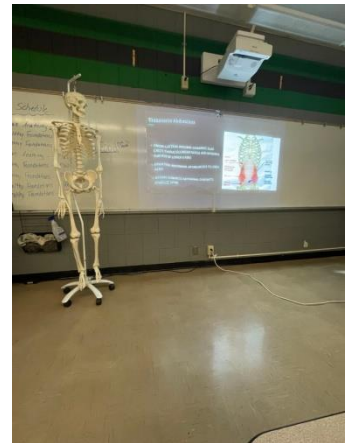
岐阜県立大垣東高等学校 2 年 安田 汐里



私はホストシスターの通うシェルダン高校を訪問した。まず驚いたのはとても広い駐車場があることだ。アメリカの高校生は車で通学する人が多いそうだ。日本の高校では見ることのできない光景だったので新鮮だった。

シェルダン高校は単位制で、生徒たちがそれぞれ学びたい科目を履修することが可能だと聞いた。それは日本の大学に似ていると感じた。50 分授業に慣れている私はアメリカの 90 分授業をとて長く感じ、少し疲れた。この日はジャズ、バンド、人体解剖学、日本語 I の授業を受けた。ジャズやバンドの授業は様々な楽器を使って演奏の練習をしていた。完成度が高く、とても贅沢な演奏を聴くことができた。人体解剖学の授業は骸骨や人体模型がたくさんある部屋で行われた。スライドを使ったり、先生が体を動かしたりしながら筋肉について説明をしていた。途中で休憩時間があり、音楽をスピーカーで流していた。とてもリラックスした雰囲気

の授業だと感じた。日本語 I の授業は日本人の先生が日本語で授業をしていた。号令や出席確認など日本の学校そのままという感じでとても面白かった。日本語 I は初級クラスだったので、まだひらがなや、乗り物の単語などを学んでいる段階だった。他の授業ではスマホを使用していたが、この授業ではスマホを使っていると先生に注意されていた。それを見て、日本の学校に沿ったルールを適用していることが分かった。



アメリカでは、授業中でも用事があると途中で抜けるといったケースがよく見られて自由だなと思った。ホストシスターもこの日歯医者に行く予定があり、授業を抜けて歯医者へ行った。学校を抜けだしている気分がとてもわくわくした。そして、そのあと 3 時間ほど空き時間があつたので、そのまま校外で過ごした。私は昼食も外のお店に食べに行ったが、学校のカフェテリアで食べる生徒がいたり、家から持ってくる生徒がいたり様々だった。

学校の授業が終わった後、ホストシスターはマーチングバンドの部活練習があつたので、それを見学した。部活中、火災報知機の誤作動があり、外に出るとピカピカとライトが光っている消防車が来ていた。生徒たちはなかなかない出来事をお祝い事のように楽しみ、叫んだり写真を撮ったりしていた。次の日にも火災報知機が鳴り、また誤作動かと思ったら避難訓練だった。日本のようにしっかり整列して全員が揃っているか念入りに点呼するということはなく、外にみんな出て、先生が感覚で生徒の数を数えるだけだった。日本の方が訓練を徹底して行っていることが分かった。

アメリカの学校生活を体験し、日本との違いを身をもって感じることもできたと共にそれぞれの国の良さを実感するいい機会となった。



サウスユージーン高校

岐阜県立大垣北高等学校 3年 河合 昂

私は、サウスユージーン高校を訪問しました。高校には曜日によって異なる3種類の日程があります。A日程とB日程は90分授業が4コマあり、C日程は30分授業が8コマあります。毎日日程が変わるので、私はとても混乱しました。また、高校は単位制で、日本の大学のように学年の異なる生徒が同じ教室で授業を受ける姿がとても印象的でした。

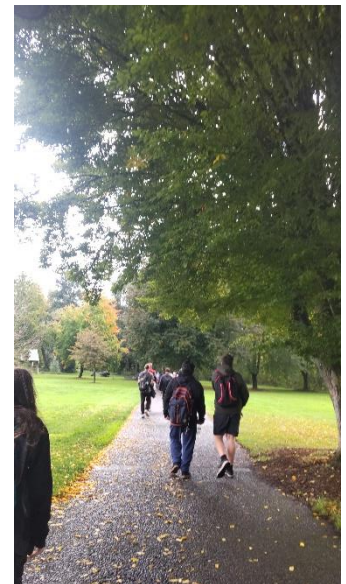


はじめに私が受けたのは、複合的な科目の授業でした。今回の授業は国語と数学を合わせたような課外授業でした。まず、村上春樹の自然についての詩を読んだ後に、グループで内容を確認しました。その後に市内の公園に行き、公園の地図をできるだけ正確に書きました。そして各自で自然についての詩を書きました。このような科目は日本の学校にはないので、とても新鮮に感じました。さらに衝撃的だったのは、教師ではなく生徒が授業を進めていることでした。もしここが日本の学

校だったなら、教師が生徒たちの考えを集めて、まとめて結論を提示していただろうと思います。しかし、先生は授業の導入や専門的な用語の説明をするだけで、授業をどう進めるかは生徒に任せていました。これは、教師が生徒をとても信頼していて、生徒に授業を積極的に取り組む力があるからできることだと思います。

次に私が受けたのは、日本語クラスの授業でした。初めに簡単な自己紹介や日本についての説明を日本語でした後に、英語で生徒からの質問に答えました。その後で体のパーツを表す簡単な日本語を学習して、皆で「あたま、かた、ひざ、ポン」の歌を歌って練習しました。私が驚いたのは、質問に答えても答えてもどんどん質問が飛んできたことです。「これぐらい質問しておけばいいだろう」という妥協がなく、聞けることを全て聞こうとする姿に圧倒されました。

私が高校訪問を通して感じたことは、アメリカの高校はとても自由だということです。多くの生徒は車を運転して通学していて、皆思い思いの服装で登校していました。クラブ活動もたくさんの種類があり、校内には多くのスポーツ施設が整備されていて、自由にクラブを設立することができます。生徒の授業への取り組み方も様々で、メモを必死に取ったり周囲の生徒と意見交流をする生徒もいれば、イヤホンをつけていた



りほかの科目のレポートを書いていたりする生徒もいました。アメリカでは、自分がどの科目を選択するのか、どんな活動をするのか、どんな服装をするのか、どのように授業に取り組むのかを全て自由に決められます。ただ、自分の選択肢が広い分、一つ一つの行動に対する責任がとても重くなります。将来自分のなりたい姿を明確にした上で選択をしなければいけないので、何をすればいいか決められている日本の高校よりも大変だと思いました。

チャーチル高校（日本語クラス）訪問

岐阜県立大垣北高等学校 2年 森 拓人

僕は、16日と17日にチャーチル高校で日本語の授業を受けた。

16日は、アメリカの生徒と日本語を読む練習をした。「好きな教科はなんですか？」や「嫌いな教科はなんですか？」など日常で使う基礎的な会話をした。この日は、ペアでこの文を読むテストで先生にチェックしてもらっていた。日本の高校の授業と違うと思ったのは、授業を受けている生徒が、スターバックスの飲み物を飲んでいたり、お菓子を食べていたり、自由に受けているなと思った。英語でハンターハンターというアニメの話をしたり、高校の勉強など雑談をした。



17日は、用意していたプレゼンを3回行った。大垣市と日本の高校生活についてと、自分の趣味について英語で話した。僕は、その場でバレーボールのブロックを見せた。一緒にジャンプしようと誘ったら何人か一緒に飛んでくれて楽しかった。1クラスにはバレーボールをやっている生徒が2人くらいいた。日本よりアメリカの方がバレーボールは人気だということが分かった。

「オレゴンと日本の違うところは？」と聞かれた時に焦って、オレゴンの自然のすごさを言おうとしたら、「日本に野生動物がいない」と間違えて言ってしまって恥ずかしかった。僕は、クエスチョンタイムで、「日本の生徒は校長先生の話をしている時どう思っているか」と質問した。正解した生徒には“おにぎりせんべい”と“どら焼き”をあげた。はじめは、どら焼きが何か分からなかった生徒が多かったけれど、「ドラえもんがよく食べているお菓子」と伝えたら分かってくれた。日本の遊びの紹介として、けん玉とじゃんけん、あっち向いてホイをやった。僕は昔けん玉を極めたので、教えたり手本を見せたりできたので良かった。じゃんけんは、アメリカにもあって「ロック、



シザー、ペーパー」が学校で習ったようにあった。アメリカの生徒と日本語のじゃんけんをしたらタイミングがずれたりして難しかった。また、生徒は「あいこでしょ」や「あっち向いてホイ」と言うのが難しそうだった。そして、kahoot!というアプリでアメリカのクイズをした。生徒が助けてくれて少しオレゴンについて知れた。生徒の中には、母親が政治家だと教えてくれたりやシェイクスピアの劇をやったと言ってくれた生徒がいた。英語のコミュニケーションは難しかったけど、何を言っているか分かって、自分の意見を言えた時はうれしかった。また、昼ごはんのためにいろいろな具のおにぎりを作ってアメリカの生徒と交流して食べた。ご飯をたべながらUnoをした。隣の子にプラス12枚してハイ

タッチするなど距離が縮まる楽しい時間だった。

アメリカの生徒と会話するのはとても緊張したけど、大切な気付きがあった。それは、言語や文化の違いがあり、コミュニケーションが難しくても、目を見て自分から意見を伝えるということ意識すれば必ず理解してもらえるとということだ。これからの人生でもこれを忘れずに生活したい。

シェルダン高校（日本語クラス）訪問

岐阜県立大垣北高等学校 2年 成願 治海

私たちはシェルダン高校の日本語クラスで合計3回の大垣市と日本の高校生との生活についてのプレゼンテーションをした。はじめの2回は日本語クラス1年生の生徒に対して、英語でプレゼンテーションを行い、残りの1回は日本語クラス5年生に対して、簡単な日本語でプレゼンテーションを行った。教室には日本の漫画が置いてあったり、アニメ作品の画像や生徒が書いた書道の作品が掲示されたりしていた。廊下の壁には世界で活躍する、日本にルーツを持つスポーツ選手の写真が貼られていた。また、日本語クラスの生徒たちは授業内で自分たちの本名とは違う日本語の名前で呼ばれていた。本名とは全く違う外国の名前を持つことは何処かカッコいいように思われて、学習のモチベーションにつながるのかもしれない。前日にホストシスターの日本語4年生のクラスに同席していたが、そこではほとんど日本語で授業が行われていた。



た。日本語クラス1年生の生徒は50音を勉強していた。

プレゼンテーションの前半部分では生徒たちの反応が薄いように思われて、もしかしたら私たちの話す英語が拙すぎて伝わっていないのかと不安になった。しかし、プレゼンテーションの最後のクイズでは正解者が多く、終わった後先生が生徒たちに私たちのプレゼンテーションから何が聞き取れたかをたずね、生徒たちの中から5人程度が発言のために指名された。生徒がなにを覚えているか、メモを取っているところからどんなところに興味をわいたのかわかり、興味深かった。

日本語でプレゼンテーションをするときは、私たちが普段特に意識もなく話している言葉よりゆっくりと、丁寧で簡単な言葉を使うことを意識したので、思ったより難しかった。

プレゼンテーションが終わった後、生徒と日本語を使って交流した。日本語1年生のクラスでは一人ずつと「私は〇〇です。どうぞよろしくお願いします。」という定型文であいさつした後、それまでに学習した50音ひらがなを使って2文字程度の日本語の単語を作るように先生が指示し、私たちは生徒たちに新しい単語を教えるように言われた。生徒たちは「あき」や「かい」といった単語を作り、私は一つのグループに「いえ」という単語を教えた。日本語5年生のクラスは日本人にルーツを持つ生徒を含む一番上級者のクラスであり、生徒たちは日本語を話すのが得意であった。私たちは丁寧で簡単な言葉を使うことを意識しながら、彼らの質問に答えた。

現地の高校生と交流することは、通常の海外旅行ではまずない、貴重な経験となった。彼らの日本語学習の見学を通して、日本語の良さや難しさについて考えた。



ビーバートン市訪問(NIKE 本社、警察署)

岐阜県立大垣北高等学校 2 年 今井 海

私達の最後の訪問であるビーバートン市は、西海岸の自然豊かな街だった。平凡な都市のように見えてもかなり有数の商業都市で、NIKE の本社等がある。最初に訪問したのは NIKE 本社で、朝一で行くと多くの社員が通勤していた。日本とは違い、10 月でも朝はとても寒かった。当然のように社員全員が全身 NIKE で、地域愛ならぬ会社愛があるように面白かった。社内には大きな池や日本庭園があり、日

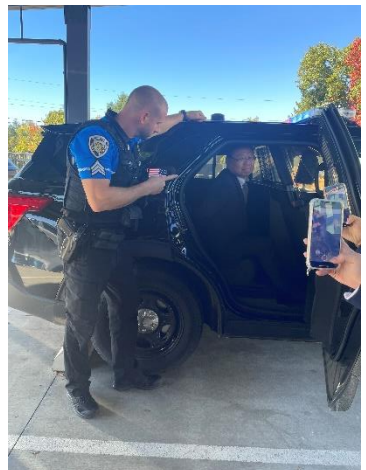


本との関わりの強さを実感した。NIKE 本社にはマイケルジョーダンなどのスポンサーの有名選手の紹介が大々的にされていた。サッカーコートやテニスコートなどの大規模な運動施設や、ジムやシャワールームもあって、設備が充実していた。会社内の廊下には歴代の重役の顔の銅像が並んでおり、なかなか壮観だった。社内を紹介してくれた日本人の方はこの本社で 20 年働いているらしく、また入社も難しいと聞いたので、凄いと思った。



次に訪問した警察署では、長年警察官を務めるラムさんに案内して頂いた。ラムさんは高身長&筋肉&スキンヘッドというどう見ても怖そうな見た目だったが、日本語がとても上手で、ジョークまで言えるほどで驚いた。アメリカのパトカーには特定の車種がないらしく、覆面パトカーのほうが多かった。署内には拘置所があり、厳重な監視体制が敷かれていた。実際に手錠をかけられ、パトカーに寄せられるという貴重な体験もできた。逮捕するという一つの動作に、手錠は後ろだったり、座席は汚れてもいいようプラスチック製だったり、細かな工夫があって驚いた。警察犬とも触れ合い、やはり怖そうだったが、見た目に反して大人しかった。アメリカは簡単に銃を使いそうなイメージがあったが、ラムさんはまだ一度も発砲したことがないと聞いて予想外だった。もっとも使われているのはスタンガンや催涙弾で、特に催涙弾は 2 日間も目に影響が出る、と聞いた。

今回のビーバートン市訪問では、観光とはまた一味違った貴重な体験ができたのでよかった。ここで感じた違いを日本での生活に活かせるよう努力したい。



ビーバートン市(SUNSET 高校、ビーバートン市役所)

岐阜県立大垣西高等学校 2年 長谷川 知英



私達は、SUNSET 高校の日本語クラスで日本の文化や学校生活について日本語でプレゼンテーションをしました。日本語クラスの子全員が理解してくれるように、難しい日本語を簡単な日本語に直したり、ゆっくりと話したり工夫をしました。練習は全て英語で行っていたので、急な日本語でのプレゼンテーションに少し戸惑いました。ですが、伝える為に考えて話すことができたので、よく考えて話す力がつ

いたと思います。プレゼンテーションが始まると、メモを取りながら話を聞いてくれる姿や、手を挙げて発言してくれる姿があって話すのが楽しかったし、嬉しかったです。とても良い経験になりました。プレゼンテーションの後は、グループに分かれて交流をしました。私は、同じグループの子と映画の話で盛り上がりました。私の話を最後まで聞いてくれたり、日本語を頑張って話してくれたことが嬉しかったです。正しい英語を使って話すことが楽しく話すことの全てではないと感じました。お互いを思いやることが大切だと痛感しました。別の国に住む高校生と話すことができて楽しかったです。



次に、ビーバートン市の市役所を訪問しました。市役所では、職員の方がビーバートン市のことをたくさん話してくれました。市役所の窓から見えるビーバートン市の景色は自然豊かで、綺麗な紅葉がとてもよく見えて美しかったです。住んでみたいと思うくらい綺麗な街並みでした。大垣市は自然を大切にしている街だと思いますが、同じようにビーバートン市も自然を大切にしているということが分かって、本当に素敵だと感じました。また、窓から見えた電車は、日本とは違ってポップで可愛いデザインで、見ることで嬉しかったです。日本には踏切があり、電車が通るときに音が鳴りますが、ビーバートン市には踏切がなく、電車が通る時に音も鳴らないので驚きました。市役所の中の市議会場へも連れていって

もらいました。皆で実際の会議と同じように座って、会議中の雰囲気を感じました。なかなかできない、貴重な経験でした。また、高橋団長が市役所の方に大垣市長から預かった手紙と、日本からのプレゼントを渡すと、とても喜んでくれて、見ている私も嬉しくなったし、これからも大垣市とビーバートン市の交流が長く続いていって欲しいと思いました。





ホームステイの思い出



ホームステイ

岐阜県立岐阜高等学校 1 年 中島 双葉

私のホームステイ先の Peck 家は、夏に我が家にホームステイしたウォーレンの家だった。知り合いがいる、ということでとても心強く感じ、アメリカに行く前からウォーレンに久しぶりに会うことを楽しみにしていた。ホームステイ先が決まってから、不安はかなり小さくなったと思う。

ホストファミリーとの対面の場所にバスが到着して、私が降りるとすぐ、ウォーレンが「久しぶり！」と、ハグをしてくれた。私の家に来ていた時と全く変わらないウォーレンの明るさにとても安心した。ウォーレンはお父さんと二人で住んでいて、お姉さんはカナダの大学に通っていた。お母さんは車で 2 時間離れた海辺に単身赴任していたが、土曜日に会いに行ったり、平日には家に帰ってきたりしていた。ホストファミリーはみんなとても優しくかった。



お母さんのいる Newport では、海辺のお店でショッピングをした。魔女をモチーフにしたような怪しい雰囲気のお店や、アルパカの毛で作った製品の専門店など、変わったお店が並んでおり、見るだけでもとても楽しかった。



日曜日はオレゴン大学でバレーボール観戦をした。大学の体育館なのに天井に大きなスクリーンがあり、VAR 判定も導入されていて驚いた。各大学のチームには Ducks などチーム名が付いており、ファンへのサービスやイベントもあって、プロのチームみたいだと思った。会場の盛り上がりも激しく、相手

サーブの時にブーイングを初めて実際に体験した。観戦の後は、本屋に連れて行ってもらい、お姉さんのおすすめの小説を買った。頑張って読もうと思う。本屋では、日本の漫画がたくさん置いてあることが印象的だった。ジャンプなどの少年漫画だけでなく、少女漫画も多かったことに驚いた。

ホームステイの期間中、休日でも平日もよく外食に連れて行ってくれた。アメリカでの食事はどれも量が多くて重かったけれど、とてもおいしかった。特に土曜日に Newport で食べたクラムチャウダーとお母さんのおすすめのタコスがお気に入りだ。

家で一番印象に残っているのは、愛情表現の仕方だ。電話を切る時や、外出するとき、別れるときにはいつも、” I love you ”と言って、家族内でよくハグをしているのがいいな、と思った。実際に私もホームステイ期間中にたくさんハグをしてもらった。



アメリカで過ごす中で、アメリカと日本では文化も感情の表現の仕方も異なることが分かった。しかし、ホームステイを通して、文化が違う人ともコミュニケーションによって意外と簡単に親しくなれると気付いた。私は最初、人に話しかけることに緊張していたが、一度話しかけると、出会った人はみんな親切で、私が話そうとしていることにじっくり耳を傾けてくれた。いつも明るいお母さん、優しいお父さん、フレンドリーなウォーレン、人懐っこい 2 匹の猫たちのいる Peck 家は、私にとってとても居心地がよく、楽しい時間を過ごすことができた。これからも交流を続け、もう一度ホストファミリーに会いに行きたい。

初ホームステイ

岐阜県立大垣北高等学校 2年 今井 海

今回のホームステイは私にとって初めてのもので、その初めてのホームステイで Philips 家の皆さんと出会えて良かったと思っている。私のホームステイ先は両親、同じ年の男の子、その兄が1人、妹が1人、犬2匹、猫2匹、ニワトリ2匹という大家族だった。事前に連絡を取っていたときに活発だという話は聞いていたが、想像よりも遥かに活発な家族だった。ホストファミリーはほぼ全員日本語を話せなかったが、それでもひたすら喋ろうと挑戦し、コミュニケーションを取れた。



土曜日は住宅街付近の丘にハイキングに行った。鹿やリスなどがいて、日本とは違った風景を楽しめた。日曜日には地元オレゴンの女子バレーの公式戦を観戦に行った。相手はテキサスのチームだったが、地元愛が強く、会場はほぼオレゴンの人たちで埋まっており、ローカルカラーの緑でいっぱいだった。日本にはないような派手なチアリーディングや、抗ガンデーということもあって闘病する人を励ますシーンなども見る事ができた。

日本のような他人行儀な国ではなく、もっと一体感のある国だと改めて実感した。

月曜日にはホストブラザーのトロイの運転する車でチャーチル高校へ。正直高校生が車を運転しているのはかなりショックだった。トロイに付いて周り、90分の授業を4回受けた。倫理、エッセイの授業など、思っていたのとはかなり違った。また、英語で物理を受けたときは、生物選択の私は電子辞書片手に90分悩んでいた。昼食はトロイの弟、ローガンの運転で有名店“タコベル”へ。美味しかったが、やはり同級生が運転する姿には慣れなかった。次の火曜日には同じチャーチル高校で日本を紹介するプレゼンを行った。その後のグループ交流で意外なことに質問攻めを毎回受けたので、やはり海外は誰しも懂れるのかなあ、と思ったりした。その日はホストシスターのクロエのバレーの試合があり、見事勝利していた。中学生の試合とはいえ、全員背が高く、白熱していた。その夜はレストランで食べたのだが、さらっと食べ残しは持ち帰っていた。日本では全く見ないが、「当然だよ。日本にはないの？」と言われ、先をゆくアメリカを感じた。これら以外にも、ホストブラザー2人のアメフトの試合を見たり、ボーリングに行ったり、ゲームをしたり、ピアノを弾いたり、充実したホームステイだった。



当然楽しいことばかりではなかった。何より話を聞きとることが難しかったり、説明しようとしても単語が分からなかったりで、時々会話に詰まってしまったことに自分の未熟さを感じた。初めてのホームステイだったが、ホストファミリーの皆さんの温かさに触れられて良かった。将来への大きな一歩になったし、かけがえのない関係もできたので、次はもっと学んで、より会話を楽しみたい。

ホームステイ

岐阜県立大垣東高等学校 2年 小竹 杏月

この研修を通して私に新たな家族ができた。サウスユージン高校で、私の名前が書かれたボードを持って出迎えてくれたが、ホストファミリーが6人勢揃いで迎えに来てくれるとは予想しておらず、驚くと共に涙が出るくらい嬉しかった。そして、その後、更に感動が続いた。TEXASの焼肉店に移動した私は、その日誕生日ではないのに“バースデーサプライズ”を受けた。誕生日の人が馬の乗り物に乗りながら旗を振り、店にいる全ての人がお祝いソングを歌ってくれるイベントで歓迎を受けた。ホストファザーが「今日はあなたが私たち家族の一員になった初めての日だから、2度目の誕生日だよ。」と教えてくれ、私は感動して胸がとても熱くなった。アメリカの文化を肌で感じられた最初の出来事だった。

食事の後には家族みんなでボーリングを楽しんだのだが、ただボーリングをプレイするだけでなく、お互いの趣味の話をしたり、兄弟の特技を披露してもらったり、1日目とは思えないほど家族みんなと仲良く打ち解けることができた。

ホストファザーは私に“アメリカらしさ”を見せようといろんな場所に連れて行ってくれた。まず、最初の Cheese Factory ではアメリカではどこでも売られているような有名なチーズらしいのだが、日本では絶対に見られない巨大サイズに驚かされた。私は見ただけで胸がいっぱいになったが、チーズやアイスクリームを試食したり、Cheese Factory 特有のお土産を買ったり、充実した時間を過ごすことができた。しかし、ここで1つ残念な出来事があった。それは、お土産売り場のレジスター店員が、支払いを済ませた白人の赤ん坊に手を振り、両親にも笑顔を見せ、とても親切に振る舞っていたのに、次の Geanell の番になった時には、一切声をかけず、Geanell の目を見ようともせず、非常に冷たい対応をとったのだ。その時は違和感を感じたが、後になって、それが人種差別の名残りだと聞いて、私の大切な家族である Geanell に冷たく接客した店員に嫌悪感を抱くとともに、未だに人種差別が無くならないことに悲しい気持ちになった。



次に訪れた Geanell の祖母の家では Geanell の従兄弟の誕生日会で親戚約 30 人が集まっていた。日本では珍しいビッグファミリーで少し驚いたが、一人ひとりが私に優しく挨拶を交わしてくれ嬉しかった。Geanell の家族は全員がメキシコ人のため、会話の中で聞こえるスペイン語がとても新鮮に感じた。一緒にゲームをしたり、食事をしたりする中で、スペイン語での言い方を教えてくれ、多文化共生の深さを学ぶことができた。

最後に訪れた Halloween Town では、アメリカらしいリアルなハロウィーンを感じられた。アメリカで有名な映画である「Halloweentown」の影響でハイレベルな仮装をする人がたくさんいて写真を何度か撮ってもらった。この場所には Halloweenhouse があり、家族みんなが入った。お化けは全く怖くなかったが、ビックリさせようとしたホストファザーのひと声に大声で叫んでしまったことで、それから家族みんなが私を脅かすようになった。小さな触れあいではあるが、絆が深まった気がして嬉しかった。

私はこの素敵なホストファミリーにとっても感謝している。いつか必ずオレゴンに戻って幸せな時間を共に過ごしたい。不自由なくコミュニケーションをとれるように、さらに英語の学習に力を入れたい。



ホームステイ

岐阜県立大垣北高等学校 2 年 成願 治海

人生初のアメリカ訪問はホストファミリーのおかげで素晴らしいものになった。私は6月に我が家にホームステイに来たレイニーの家でお世話になった。レイニーが我が家に来た時、私は英語でしゃべることに自信がなかったし、彼女も自分から話すことがあまりなかった。だから、よくあるアメリカ人のイメージとは違い、物静かな人だという感想を抱いた。今思えば、彼女が寡黙だったのは、慣れない土地での不安や疲れ、緊張のせいだったのだと思う。逆に、アメリカという慣れない場所で体調が安定しなかったこともあり、私のほうがおとなしくなってしまった。

事前に海産物を食べたいと伝えと、ビーチに行き、その近くで海産物を食べることを提案してくれた。彼女自身は魚が嫌いらしく、あまり



乗り気ではなかったが、日曜日の朝、ホストマザーが運転する車に乗り込み家を出発した。まず、水族館に連れて行ってもらった。日本ではあまり見かけない種類の海洋生物がいたと思えば、日本でもよく見るイワシのトルネードを見ることもできた。売店は広く、私が行ったことがある日本の水族館の売店と比べて、服飾の取り扱いが多いように感じられた。昼食は海が見えるレストランでとった。メニューが出てきて、私のスマートフォンはインターネットに接続できない状況だったので、なんとか自力で読解しようと頑張ったが、どうしてもわからないところはホストマザーが快く

かみ砕いて説明してくれたので、無事注文を終えることができた。文字だけのメニューからどんな料理なのか想像することが難しかったので、レイニーが日本に来た時に、日本の写真を主としたメニューを絶賛していた理由がわかった。私はサーモンのサンドウィッチを注文した。アメリカに滞在する間つねづね思っていたことだが、日本とアメリカでサンドウィッチの姿がずいぶん違う。写真を見ていただくと私の混乱がお分かりいただけるであろう。アメリカでサンドウィッチを注文するとまるでバーガーのような料理が出てくる。日本での白い姿とは大違いだ。このときはアメリカでの二度目のサンドウィッチの注文であったため、このような料理に驚くことはなかった。その上、サンドウィッチしか頼んでいなくても、勝手にフライドポテトがついてくる。ここも日本と違う点だ。しかもボリュームミー。

ここでは特にサンドウィッチの違いについて語ったが、その他にも日本との文化の違いを感じる瞬間が多々あった。イタリアンやタコスなど食べられないものが連日つづき、正直なところ、食に関しては滞在中日本が恋しくてたまらなかった。これは、文化の違いを大いに体感できたということだろう。アメリカの文化のなかでの生活は普段の生活とは予想以上に違うところが多かった。将来、海外から来た人と関わったり、私自身が海外で働いたりする可能性は大いにある。そんな時に今回の経験が活きるだろう。



My second family

岐阜県立大垣西高等学校 2年 長谷川 知英

私のホストファミリーは Rogers 一家。私と同年のホストシスター Anna と、妹、弟、両親、祖父の 6 人家族で私にとって大切な第 2 の家族にこのホームステイで出会うことができた。ホームステイをした 5 日間の中で特に心に残った 2 つのことを書こうと思う。

【スーパーマーケットで学ぶアメリカの文化】

ホームステイ中、スーパーマーケットに連れて行ってもらった。天井が高く、広々としていた。商品が並ぶ棚はとても高く、棚の上の方の商品を自分で取ることが出来なかった。いちばん驚いたのはお菓子の品数の多さだ。日本のスーパーマーケットとは比べ物にならない品数の多さにわくわくした。夢が詰まった空間だった。アメリカ人は本当にお菓子が好きなのだと思う。買い物中に、通りすがりのお客さんに何度か声を掛けられた。最初は私が日本人だから珍しく思って声を掛けてくれたと思っていた。しかし、一緒にいた Anna が見知らぬ人に声を掛けられていた時、驚くことなく会話していたのを見て、声を掛けたり、掛けられたりするのアメリカではごく普通だと分かった。声を掛けてくれる人は、服装や持ち物を褒めてくれる。通りすがりの人を褒めている姿は日本ではあまり見ないが本当に素敵な文化だと思った。



【ホストファミリーとの時間】



ホストファザー、ホストマザーとは最後の 2 日間しか一緒に過ごせないと知って、仲良くなれるか心配だった。そんな不安の中初めて 2 人と食べたご飯はピザだった。とても大きくて分厚いピザを前に戸惑った。私が口に入れる姿を横で見ながら「keep going!」とホストマザーは言った。口にもう入らないというのに笑いながら言い続けるホストマザーの明るさに心配なんて必要なかったと分かった。皆で映画を見たり、カードゲームもした。映画は英語で、全てのストーリーを理解することはできないし、カードゲームもルールが難しかったけど、それでも楽しいと感じたのは、私を楽しませてくれるこの家族と一緒にしたことだからだと思った。そして私は、5 日間で沢山のやさしさを受け取った。私の願いは、全て叶えてくれた。買い物中、私が美味しそうと言った物をいつの間にか買ってくれていたりするやさしさが嬉しくてたまらなかった。また、本当の家族のように接してもらえたことが嬉しかった。家族と同じ様におやすみの挨拶をしたり、旅行から帰ったホストマザーが私にもお土産をくれた時、家族の一員になったみたいで言葉にできない嬉しさだった。

今回の研修で、日本との文化の違いに触れると共にアメリカの魅力を沢山知った。将来の夢である英語の教員になれた時には、この研修での経験を 1 人でも多くの生徒に伝えられる。そんな教員になりたい。



ホームステイ

岐阜県立大垣東高等学校 2 年 村中 望桜

○アメリカでの生活

初めてのアメリカ、急に押し寄せる本場の英語に、私はビビリ散らかして初日と 2 日目の会話はあまりなじめず、部屋に引きこもりかけそうになりました。それでもホストマザーのケイティやホストシスターのエイサが話しかけてくれたので 2 日目の夜には慣れて、エイサとエイサのパートナーと映画を見ることができるようになりました。私自身も研修に行く前に配布された先輩方のやっておけばよかったことの話集にて『もう少しホストファミリーと話してやりたいことをやっておけばよかった』というニュアンスの後悔をことあるごとに思い出し、後悔しないように、日本に帰ってからうじうじ思い悩んだりしないように、そう思いながら 5 日間をすごしました。結果として様々なところに行くことができ、私の初海外は良いものになりました。

○アメリカでしたこと

ホストマザーのケイティにすすめられて、エイサとエイサのパートナーと一緒に映画『Elf』を見ました。ネットフリックスに日本語字幕・音声はなかったけれど、英語字幕を付けてもらい、三人で鑑賞しました。ラストでは感動の涙があふれました。英語字幕によって 8 割方理解できたので、リーディングを学校でこれでもかというほど教えてもらっていて良かったと心の底から感じました。



土曜日はエイサとサタデーマーケットに行きました。野菜や卵などの食品から、装飾品まで様々なものが売られていました。私はヘアクリップと、どこで使うのか皆目見当のつかないサングラスを買いました。スクエア型でグラスの色が緑色のサングラスと、雲型でグラスがピンク色で下にきらきらとしたビジュのついたサングラスを買いました。そんなサングラスが似合う人間になりたいです。



出張で南アメリカに行っていたホストファザーと合流し、彼とエイサと共に、パンケーキ屋に朝食を食べに行きました。パンプキン味のパンケーキを頼みました。ふわふわでとても美味しかったです。その足でオレゴン大学にも向かい、大学の施設を案内してもらいました。大学の敷地内は緑がたくさんあり、リスをたくさん見ました。お昼からはホストファミリーと 4 人でパンプキンハンティングに行き、カボチャの乗り物に乗りました。オレンジ色のカボチャがたくさん畑に転がっていて、私には新鮮で、おもしろい光景でした。カボチャを 4 つ買い、帰路につきました。

平日は高校へ行き、エイサと同じ授業を受けました。放課後になるとみなそれぞれ部活にいそしんだり、家に帰り、家族の時間を過ごしたりするそうです。3 日間の放課後はそれぞれ、ジャック・オ・ランタンを作ったり、ボーリングに行ったり、メイドインオレゴンというお土産屋さんに連れて行ってもらいました。



日本とは違う右側通行に驚いたり、右側を走るという違和感に奇妙な心地になって車酔いをしかけたりと、初海外で緊張しましたが、ホームステイ先のご家族がとてもやさしく温かったのでとても楽しい生活を送ることができました。ただ、帰った後は、両親からいただいたお小遣いが 100 米ドル以上余ったので、一生着ないようなパーティードレスを購入したり、家族のためのお土産をもっと買ったりすればよかったと思いました。

ホームステイ先の思い出

岐阜県立大垣北高等学校 2年 森 拓人



僕は、リンビー家にホームステイした。ホームステイでの思い出を3つ紹介します。

1つ目は、家での思い出です。まず、滞在初日はシャワーの使い方が分からなかったことです。いつまで待っても冷たい水でした。シャワールームは一枚のカーテンしかなく、トイレと同じ部屋だったので床が水浸しになってしまいました。日本のものとは違い、使うのに慣れていなかったのが大変でした。次に夕食にピザを食べました。事前にマルゲリータが好きだと伝えていたので、用意してくれました。大きさは日本の6倍くらいで、4分の1くらい食べました。そしてホストファザーは、僕によく話しかけてくれました。ファザーは、指圧マッサージの先生で「タクトのお父さんの仕事は何？」と聞いてきました。僕は「お父さんは自分の仕事を隠して教えてくれない」と言ったら、「Is he a spy! ?」とアメリカンジョークを投げかけてきてとても話していて楽しかったです。



2つ目は、バレーボールの観戦です。オレゴン州とテキサス州の試合でした。州同士が戦う大きい試合でした。皆オレゴン大学の緑色の応援シャツを着ていました。僕も、前日にホストマザーに買ってもらい、着ていました。デザインがとても好きで日本に帰ってからよく着ています。バレーボールの試合は、なかなかボールが落ちなかったり、強烈なスパイクやブロックが決まった時は鳥肌が立ちました。バレーのルールが日本とは違って、リベロがサーブを打っていたのでとても驚きました。試合観戦をする時は、ポップコーンを食べました。250gほどあって、試合中には食べきれませんでした。追加で、アメリカで試合を観戦する時に気を付けないといけないことは、「カバンを持って入れない」ことです。銃を持っているのかと疑われるとファミリーが教えてくれました。

3つ目は、家の近くの散歩です。リンビー家はチャウウィという名前の子犬を飼っていました。マザーが散歩をしていたので一緒に付いていきました。家の周りは自然が豊かで空気がとても新鮮でした。駐車場に七面鳥がいたり、小さなリスがいたり、鹿が木の奥にいたり多くの動物を見ることが出来ました。ホストブラザーのメイソンが歩いていた七面鳥を指さして「It's delicious!」と言って面白かったです。アメリカの道路を歩いていると色々な発見がありました。まず、Little Free Libraryという地域の人が皆で本を貸し借りするものがありました。おさるのジョージでしか見たことがなかったので、本物を見られて嬉しかったです。アメリカの家には住所を示す番号が書いてあり、日本との違いを知れて良かったです。



ホストファミリーと交流する中で、Googleの英語翻訳を使えば解決したこともありました。それでも、自分の英語能力が低くもっと多く話したかったと思いました。アメリカ派遣を通して、「英語をもっと話せるようになりたい」や「また海外旅行をしたい」と思えるきっかけになりました。本当にアメリカに行けて良かったです。

ホームステイ

岐阜県立大垣東高等学校 2 年 安田 汐里

私は今回 2 つの家庭にホームステイをした。1 つ目の家庭のケイトリンと週末を過ごし、2 つ目の家庭のテイラーと学校のある平日を過ごした。



ケイトリンの家で過ごす最初の夜は、ベランダで家族みんなが集まり、焼きマッシュマロをしながら談笑した。誰もが憧れるようなオシャレな夜の過ごし方を経験できて贅沢な気分だった。アメリカの色々な食べ物に挑戦したいという私の望みを聞き入れて、ハンバーガーやパンケーキ、ホットアップルサイダー、ピザ、ワッフル&チキンなどを食べさせてくれた。どれも本当においしくて、幸せだった。アメリカではトッピングなどを自分で選ぶことができるお店が多く、アレルギーや苦手なものがある人にも配慮されているなど感じた。全てたிரைげた私は使わなかったが、食べ切れないときはドギーバッグがあるのも日本とは異なっていた。これらはフードロスの削減になるので日本でも導入するべきだと思った。ハロウィンの季節だったので、カボチャ畑やハロウィンショップにも行った。カボチャ畑では想像以上の大量のカボチャに驚きが隠せなかった。様々な形や大きさのカボチャがある中から、自分の気に入ったものを選び、世界に一つしかないオリジナルのジャック・オ・ランタンを作った。またハロウィンショップではたくさんのコスチュームが売られていてわくわした。中には急に飛び出してくるびっくり箱のようなおもちゃもあった。何も知らない私は声をあげて驚いた。ケイトリンと二人で大爆笑して仲が深まった。2泊3日はあっという間で、ケイトリンの家族との別れはとても悲しかった。家族みんながハグをしてお別れをしてくれて、すごく温かい気持ちになった。

次はテイラーの家に行った。ホストマザーお手製のパンプキンパイは、今回の研修の中で一番おいしかった。もっと食べたいと伝えればよかったなと今でも後悔しているくらい忘れられない味だ。テイラーは日本が大好きで、部屋には日本を感じるものがたくさん置いてあった。日本語を4年ほど勉強しているというテイラーはとても日本語が上手なので、テイラーが日本語で、私が英語で会話をしていた。それはなんだか不思議な感覚で面白かった。お互いにわからない単語や表現があれば質問し合い、良い学びとなった。テイラーはいつも私に何をしたいか聞いてくれた。ある日は一緒にゲームをして、またある日はネイルをしながらアニメを見た。最後の日には一緒にクッキーのデコレーションをした。テイラーはハロウィンらしいデザインがとても上手だった。ホストマザーはとても芸術的でユニークなデコレーションをしていた。私も大好きなサツマイモなどを描いた。そのあとはアメリカで有名なハロウィンの映画を見た。英語で見たので難しかったが、テイラーが解説をしてくれたので理解して見ることができた。とても楽しい時間だった。テイラーとのお別れも本当に悲しくて、お別れの日の朝から泣いてしまった。

今回のホームステイではなんでもトライするという目標をもって、積極的にコミュニケーションを取り、アメリカの文化や生活を身をもって感じる事ができた。自信が持てていなかった以前の自分からは想像できないような前向きな人へと成長でき、この経験は一生ものの思い出となった。



ホームステイ

岐阜県立大垣北高等学校 3年 河合 昂

ホストシスターのソフィーは両親と1匹の犬と4匹の猫と一緒に住んでいて、近くに住んでいる彼女の姉も、私のことを温かく迎えてくれた。そして、私の家族は3人から12人になった。そう言えるほど、ホームステイの思い出は私の心に強く刻まれている。日本のことが好きだというソフィーは水筒にたくさんのマンガのステッカーを貼っていて、最近の曲だけではなく、私の知らない昭和のシティポップもノリノリで歌っていた。

私がとても驚いたのは、アメリカの食文化だ。朝は意外と軽めで飲み物とトーストだけ、何も摂らない人もいるという。ゆったりと一日が家族のだんらんから始まるのは、とても素敵だと思った。私がアメリカで使ったフレーズ第1位は、“Sorry, I’m full.” だった。それほどにアメリカのご飯は何もかもが大きかったのだ。アイスはシングルでもトリプルより大きかったし、ポテトはハンバーガーと同じくらいの量で、ホストマザーの作ってくれたミートボールスパゲッティは映画に出てくる料理のようだった。そして全部夢のようにおいしかった。ショッピングモールで食べた Sushi Burrito はピリ辛で慣れない味だったけれど。



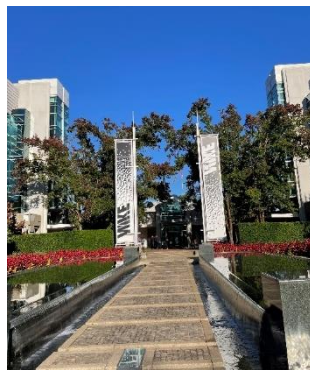
ここで私が驚いたのは、どれだけ料理が大きくても、皆がちゃんと料理を食べきっていることだった。単純に胃袋が大きいわけではなく、食べきれない分は紙箱に入れて、後で朝ごはんにしたりおやつにしたりして食べていたのだ。出されたものを残さず食べている姿は、日本の「もったいない」の心に通じるものがあると感じた。ただ、ソフィー達姉妹は夕飯前にも関わらずおやつをパクパク食べてから夕飯とデザートをぺろりと平らげてしまっていたので、きっと胃袋の大きさが違うことは確かだと思う。

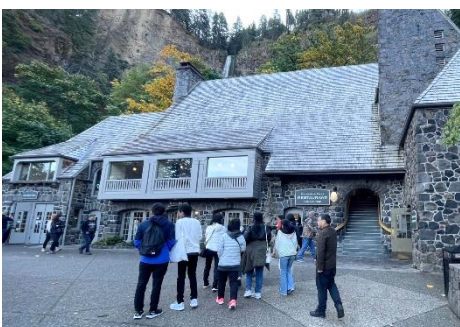


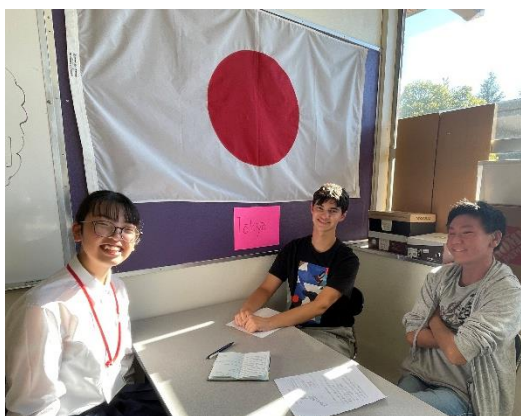
ご飯を食べるときに、私が無意識にいただきますの挨拶をしていたことがあった。仏教の挨拶かと意味を聞かれて、一瞬頭が真っ白になってしまった。が、身振り手振り表情筋を総動員して何とか「神仏に対しての挨拶ではなく、命をいただくことや、生産者への感謝を表す挨拶だ」と説明することができた。このような挨拶はあるかとホストファザーに聞いてみると、ホストファミリーはアイルランドの神々を信仰していて、挨拶はないが感謝を込めた祭りがあるとのことだった。私はアイルランドの神話や文化の本を読んだことがあったので、とても話が盛り上がった。相手の文化を知るには、まずは自分の文化を理解していることがとても大切なのだと実感した。

私に親切にしてくれたソフィー、たくさんの事を教えてくれたホストファザー、おいしいご飯を作ってくれたホストマザー、そして私の不安を吹き飛ばしてくれたペットたち。かけがえのない家族と出会うことができ、素晴らしい時間を過ごせたことに感謝したい。









【第5回 大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州 ビーバートン市、ユージーン市研修派遣報告書】

編集 公益財団法人 大垣国際交流協会

大垣市室本町5丁目51番地 スイトピアセンター学習館2階

TEL 0584-82-2311

<https://www.i-oiea.jp>

発行 令和5年(2023年)12月